



パークアベニュー



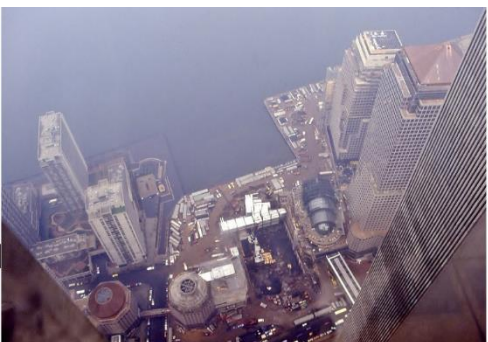
ロックフェラーセンタービル前のクリスマスツリー



建設中のバッテリーパークシティ



フルトンマーケット



WTC ビル展望室より建設中のバッテリーパークシティ

夕方、ニューヨークのジョンFケネディ空港に着いた。
マンハッタンに向かうウィリアムズバーグ橋から、薄暮の澄み切った空を背景に、超高層ビルの屏風が建ち広がった。

そしてエンパイアステートビルやクライスラービルなどのトップがカラフルにライトアップされていた。

夢のような風景に、ニューヨークに来たのだと感動した。

ホテルに着いて直ぐに、暗くなっていた街へ探検に出ると、人通りが多い通りにでた。

人が来る方向に辿っていくと、イルミネーションに輝く大きなクリスマスツリーが立っていた。

そこには大勢の人や警備の警官がいて、ロックフェラーセンターの前のクリスマスツリーが、点灯式を済ませただけだったと分かった。

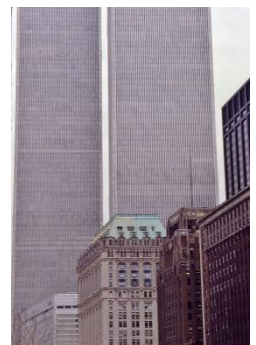
予期せぬ場面に出くわしラッキーだったが、もう少し早く来ていればと、ちょっと残念な気もした。

ニューヨーク市役所を訪問し、都市計画局長をはじめ幹部職員と面談し、横浜市との比較など意見交換が出来た。

アーバンデザイナーという名刺を持った恰幅のいい女性職員がいて、事業が進行中のバッテリーパークシティと、サウスストリートシーポートのフルトンマーケットやピア 17 など、ウォーターフロントの再開発の現場を案内してくれた。

ワールドトレードセンタービル（WTC）も訪れたが、今では9.11の事件で失われてしまった。

「ニューヨークは命の危険があるから十分に気をつけろ」「セントラルステーションの中では立ち止まってはいけない」など注意を受け、緊張しながらの視察であった。





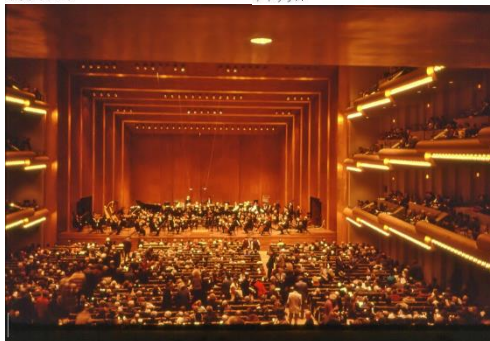
ポケットパーク



アトリウム

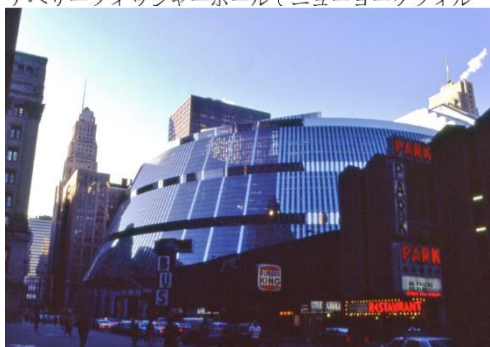
超高層ビルの建設に当たって作られたポケットパークが、寒い気候の関係で利用されず、暖かいアトリウムがとって代わってきた様子もよく分かった。

リンカーンセンターのアペリーフィッシャーホールで、バーンスタイン指揮のニューヨークフィルの演奏を、商社に勤務している義兄が手配をしてくれていて聴くことが出来た。



アペリーフィッシャーホールでニューヨークフィル

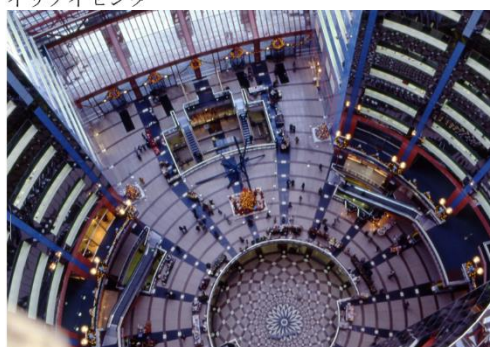
次のシカゴに行くため、空港まで乗ったタクシードライバーとうまく会話が通じず、搭乗する NW247 便が発着するターミナルビルになかなかとり着けず、間に合うかどうか心配させられた。



イリノイセンター

シカゴでは、ホテルの近くに、曲面が傾斜した全面ガラス張りの建物が、周辺のビルとは全く異なる形で異彩を放っているのがまず目につき、トランクを部屋に置いて直ぐ見に出かけた。

ガラスに覆われた巨大なアトリウムをもつ「イリノイセンター」というビルで、円形の平面と傾斜したガラスの壁面、青と赤をアクセントカラーにした色使いのシャープでドライな感じのする建物だった。



イリノイセンター (アトリウム)

ニューヨークで見たフォード財団ビルも、ガラス張りの巨大なアトリウムをもつビルだったが、内部に植物を配置してソフトな印象があったのとは対比的だった。



フォード財団ビルのアトリウム

いくつかのビルの外壁に温度計があって気温が分かり、初体験のマイナス 20℃の中を歩き回ったが、鼻毛がバリバリだった。



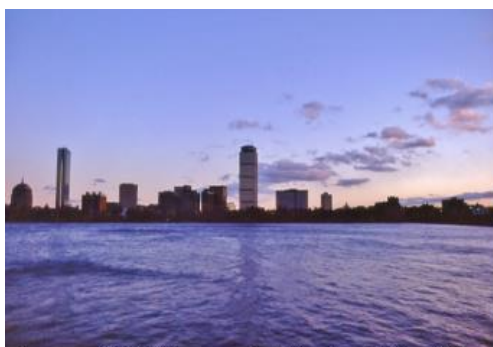
ジョンハンコックビルよりシカゴの夕景

当時、アメリカで最も高いシアーズタワーの展望室からの街の俯瞰を楽しみ、その後ジョンハンコックセンタービルの展望室からは暮れゆく街の変化する美しさに見とれて、暗くなるまで長居をしてしまった。



ジョンハンコックビルよりシカゴの夕景

ビルの周辺の高層建築などが集中する地区の背後に、低層の住宅地が広がる光景が、昼間と違った姿で浮かび上がり、グリッドパターンの市街地の構造がよく分かった。



チャールズ川対岸の MIT からボストン市街の夕景



賑うクインシーマーケット



ニコレットモールをまたぐスカイウェイ



坂の街



高層建築は地形の高いところに

航空機便の手配の関係で、ミシガン湖畔のシカゴから東海岸のボストンに NW034 便で戻るスケジュールになっていた。

ボストンの街は、歴史的な建物や街並みと、新しい建物や街並みが混在する美しい街だった。

特にウォーターフロントのクインシーマーケットやファニエルホールマーケットプレイスはクリスマスシーズンということもあって賑わっていた。

ボストンから NW67 便でミネアポリスに飛んだ。

ミネアポリスは、バスとタクシーの乗り入れしか出来ないトランジットモール（ニコレットモール）を中心に、ビル建設に伴ってエアコンの効いた歩道橋（スカイウェイ）でネットワークしていく、珍しい都市計画の街を視察した。

この街も、雪模様のマイナス 20℃の世界で、通りを歩く人はなく、温かいスカイウェイと建物のアトリウムが連絡する歩行者空間の有効性を実感させられた。

そして NW159 便でサンフランシスコに向かった。

サンフランシスコは、地形の高低に関係なく、グリッド状に街路を作った街が、坂道による眺望や風景のさまざまな変化を創り出していた。

街のあちこちで、都市空間のスケールを感じることが出来る面白さを感じた。

市役所の都市計画局を訪問し、アーバンデザインプランについてヒアリングをした。

高層建築は地形の高いところで認めてスカイラインをより強調させるなどのデザインガイドラインの意図や成果などの説明を受けた。

持参した東京都の「都市美についての調査報告書」にあるサンフランシスコのところを見せたら、「日本でこんな形で紹介されたのか」と興味深そうに見て「上司にも見せたい、コピーをさせてくれ」と頼まれた。



歴史的建築内部の公開大理石貼ホールでハーブ演奏

缶詰工場を活用したザキャナリーやチョコレート工場を再利用したガラデリスクエア、ふ頭を活用した商業施設ピア 39 など、歴史的な資産やウォーターフロントの資産を活用した所業施設や文化施設が街の魅力を高めていた。

歴史的建物の外壁保存によって、通りに面した内部が大理石貼のホールになって開放され、ちょうどハーブの演奏をしていたが、ホッとする温かい光景だった。



緑の丘建築のオークランド美術館

バートという新しい高速鉄道で対岸のオークランドに渡り、緑に覆われた人工地盤を重ねたようなかたちをしたオークランド美術館を訪れた。

建物が環境に溶け込んでしまうような施設は、多くの美術館の建物が、自己主張するような形態をしているのとは違った考え方で造られていて面白かった。

最後に訪問したサンフランシスコは、気候も暖かく、今回視察した都市の中で一番明るくきれいに見えて、大変良い締めくくりになった。

帰国は、アンカレッジから成田経由の東南アジア行きの PA011 便だったが、ほとんどが年末で東南アジアに帰国する人間で満席だった。

搭乗時間が相当遅れ、「荷物があまりに多く、積み込むのが大変で出発が遅れている」と待合ロビーにアナウンスが流れると、大ブーイングが起こった。

大分待たされて搭乗し周りを見渡すと、機内に持ち込まれた荷物ものすごく、座席の膝の前や上に目一杯積み込まれていて、背もたれが全く倒せず、成田まで身動きが出来ない状態で過ごさざるを得なかった。

こうして初めての欧米の旅は、多くの人に協力してもらいながら無事に終了することが出来た。

それにしても、39 日間で曲がりなりにも地球を一周することになる強行軍で、後になって振り返ると、よくこんなスケジュールをこなせたものだと思う旅だった。

しばらくして、既に OB になっている田村明さんが、新都市センターの事務所に訪ねてきて「どうだった、初めての海外一人旅は。期待と不安に満ちた気持ちで良かったろう」と様子を見に来てくれた。

「大変刺激的でいい勉強になりました」と諸々の報告をさせてもらった。

写真などで見ただけだった建築や都市空間に、直接触れられることが出来、目からウロコの旅だった。それほど好みではなかったパンが、とても好きになっていることに気がついた。

(2019 年 1 月 記)